

分科会 テーマ「養護教諭の専門性を高め、実践的な研修を深める」

第1分科会 「小中学生の目の健康」

講師：さくら眼科医院長 松久 充子 氏

外傷…小児の眼球・眼窩壁は柔らかい。眼外傷の後遺症はリハビリ不能である。

アレルギー・感染…アレルギー症状の強いときは、搔かない、手洗い・洗顔・可能なら洗眼（水道水）・うがい、冷やす（冷たいタオル）。こすらない！

視力関連…特に就学時健康診断後の視力 1.0 未満を放置させないこと。弱視の早期治療開始は就学後では遅い。7歳が臨界期でありそれまでの治療開始は効果が早い。

色覚…日本学校保健会の「色のバリアフリーを理解するためのQ&A」は必見。

視覚障害…一度見ると、次からは「見える」（記憶を見る）。いかに様々なものを見せておくかが重要。ロービジョンエイドの選択・使い方指導（拡大鏡、ICT活用等）。

発達障害…眼追従性・衝動性眼球運動の観察（発達性協調運動障害の疑い）。

共生社会…with Voice 視覚障害者への声かけと誘導のポイント5つ。

<分科会の様子>

眼外傷の応急手当から色覚、発達障害についてまで、幅広い知識と経験をお持ちで、現場での課題や疑問に対して明快な回答をもらえ、とても充実した分科会であった。



第2分科会 「学校医と養護教諭のパートナーシップについて」

講師：南寿堂医院長 岩田 祥吾 氏

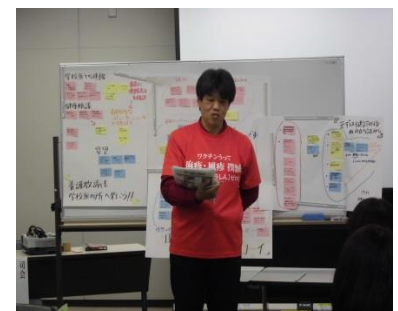
学校医とは 職務を果たすだけにとどまらず、その専門性を活かし学校保健関係者と協調し、学校現場・家庭・地域のコーディネーターとしての社会的役割を期待されている。さらに、学校医は学校現場における子供たちの「アドボケーター（代弁者）」でもある。

学校がすべきこと 学校保健計画の計画的な立案 → 1・2月中に、より具体的な提案を！
健康診断以外の学校保健委員会日程や健康相談日等も含めて提案する。

連携のポイント 管理職の理解と協働が必要不可欠 → 養護教諭一人に任せない！
学校は、学校医が活動しやすいように校内体制で「お膳立て」をしてほしい。

<分科会の様子>

前半は、岩田先生から実際に取り組まれている保・幼・小・中・高の学校医の立場としての連携・協働についてスライドで提示された。特に、まとめのスライドショーでは、“ドクターコイー”の来園・来校によって笑顔が溢れる子供たちの姿に感動を受け、学校医との連携・協働の重要性を改めて実感した。後半のグループワークでは、校種別に課題を洗い出し、意見を出し合った。その後、各グループが目指したいパートナーシップについてまとめ、岩田先生からアドバイスをいただいた。校内ですぐに取り組むことができる連携・協働のポイントを参加者全員で共有することができた。



第3分科会 「歯と口のケガを防ごう」

～学校生活やスポーツでの外傷予防と応急処置～

講師：静岡県歯科医師会専務理事 日本体育協会公認スポーツデンティスト
尾崎歯科医院院長 尾崎 元紀 氏

事故発生の陰に潜む4つの「無」 無知 無理 無防備 無反省

事故やけがを防ぐためには ↓

安全学習 体調管理 防具装用 反省会 が必要

<分科会の様子>

前半は、口腔外傷の症状や応急処置、治療方法について聞いたり、学校で起こる歯と口の外傷事故の事例をあげながら、事故防止に関するポイントを教えていただいたりした。

後半は、正しい歯みがきの方法を、実際にブラッシングしながら学んだ。また、だ液と味覚の関係を体験しながら学んだ。普段、何気なく使っている口腔機能の意外な効能を知ることができ、学校の子供たちにも体験させたいような演習だった。さらに、指導に使える教材として、日本スポーツ振興センターの教材カード（歯科編）や日本歯科医師会の「日歯8020テレビ」等も紹介していただいた。スポーツにおいては歯と口の事故防止のためのマウスガードの装着が重要であること、マウスガード着用の効果等の普及啓発を図ることの大切さも教えていただいた。



第4分科会 「不登校防止を目指したピア・サポート」

講師：静岡県立松江之島高等学校 山口 権治 氏

『ピア・サポート』とは、人とつながる力を育てること。具体的には、人を助けて 人に助けられ 共に楽しいことをしたり問題解決をしたりして 人との「つながる力」を高めながら成長することである。



心身ともに健康なパーソナリティーを持った生徒を育成することにより、「生徒の問題は生徒が解決」「保護者の問題は保護者が解決」することができ、「教師は、児童生徒と向き合う教育に専念できる」環境が整う。つまり、ピア・サポート活動は、生徒善し、教師善し、保護者(地域社会)善し、となる画期的な「教育手法」である。

<分科会の様子>

前半は、「ピア・サポート」の意味・トレーニングの内容・教育的効果についてお話をいただいた。友だち同士がもめているところにトレーニングを受けた生徒が仲裁して解決する映像や、ピア・サポートトレーニングを取り入れている高校ではもめごとが減少し相手の気持ちを理解する習慣ができるようになったという実践が印象的だった。

後半の演習では、クレヨンを使ってハートの絵の中に「今の気持ちに合った好きな色」を塗り、その後3人グループで、色の説明や絵に対するコメントを伝えあった。自分が伝えたことを相手が理解してくれることで「気がつく」ことがあり、話を聞いてもらったり人と関わったりすることで「認められている」気持ちが持てることを体験した。

